

司馬遷の夷狄対策 〈李陵の禍〉を中心に

森 熊 男

一 はじめに

前漢の武帝時代は、公羊伝にいう「一統ヲ大ニス」(隠公元年)、
「王者ハ天下ノ一ナランコトヲ欲ス」(成公十五年)という、いわゆる
中華思想に基き、漢の文化を四方に光被せんがため、夷狄に対して積極
的な対策が採られた時期であった。逆にいえば、漢帝国に対する夷狄の
勢力・侵略がそれだけ盛んな時代であったともいえる。従って、武帝の
治下に於いては、夷狄に対して如何に対応するか、夷狄問題を如何に解
決するか、これが、知識人たちに課せられた重大問題であった。武帝治
下に生きた司馬遷は、果して、夷狄問題をどのように考えたであろうか。
彼の場合、夷狄問題そのものに関わる事件(匈奴に降った李陵を弁護し
た)で、腐刑という忌むべき災厄に遭っていることから考慮して、単に
この時代が知識人たちに(従って司馬遷にも)解決を要請した問題とい
うにとどまらなかつた。否、むしろ司馬遷と夷狄問題との関係は、他か
ら要請されて考え始めるというような単純なものではなく、司馬遷自ら
が主体的に解決すべき性質のものであり、両者の関係とは、いわば因縁
的な関係を持つものであったと言えるのである。しかも、あの〈李陵の
禍〉は、先人の指摘した通り、『史記』編纂の一因にもなっていること
を考慮すれば、司馬遷の夷狄対策は自ら『史記』の中に吐露されている

ものと推理される。更には又、『史記』編纂の後、友人・任安に宛てて
記された手紙文中には、直接的に〈李陵の禍〉に触れた箇所があり、こ
こにも又、彼の対夷狄策を窺うことができる。そこで、この小論では、
『史記』と『報任少卿書』とを分析することに拠って(方法)、彼の夷
狄対策を明らかにする(目的)。

二 友人・任安への手紙から

ここに、宮刑に処され生き恥をさらしながら生きていると自ら意識し、
その意味で絶望の深淵に身を置いていた司馬遷が、これまた死刑という
絶望の淵に立たされている友人・任安に宛てて記した長文の手紙がある。
この手紙がどのようなようにして伝えられ、残されて来たのか、(奇跡)とい
うほか形容のしようもないが、『文選』に記録されて今に残る手紙の中
から、〈李陵の禍〉に関わる記述を抽出し検討してみよう。

先ず初めに、司馬遷の、李陵弁護の動機・目的を明らかにしておこう。
それによって、彼の匈奴観、あるいは匈奴対策の基本理念を知り得よう
からである。

……李陵の軍功を推言して、(李陵が匈奴に敗戦し投降したこと
で)失意のどん底にある武帝をお慰めし、更に群臣たちがあれこれ

と李陵を批判するのを止めさせたい、と思ったのです。

この一文こそ、司馬遷の、李陵弁護の動機・目的を最も簡明に表現したものだと言える。即ち、匈奴との戦闘で上げた李陵の戦功を説き明かすことよって〔方法〕、武帝の沈潜した心を解きほぐし、同時に、匈奴に降った李陵に対する大臣達の批判・非難を閉塞すること〔目的〕、これこそが司馬遷が求めたものであった、と言える。が、腐刑に処された彼の鬱積・沈潜し、複雑化した精神は、この一文だけで李陵弁護が十分に果し得たとはせず、同じ主旨の文章がまこと〔執拗〕と形容し得るまでに、繰り返し繰り返し述べられている。

私は、李陵には国士の風格が備わっていると思います。一体、彼は、己れの一生を顧みることもなく、万に一つの生きる見込みもない危険な仕事（匈奴征討）に対してさえ、臣下として漢帝国のために奔走しています。その事は、それ自体で奇特なことだと言わなければなりません。なのに今、（戦闘の如何なるものかも知らず）己れの身と妻子との保全をのみ考えている臣下たちが、李陵のたつた一度の失敗を取り上げては、ここぞとばかり、有ること無いこと、こぞって述べたてます。これは、私にはとても堪えられたことではありません。

李陵が敗れたとの知らせが報ぜられるや、君主には食事の味さえ解されず、政務を取られることにも物憂くなされ、大臣たちは、あれこれ気をもむだけで何も手につかない状態。主上の、あまりの悲しまれ様を見るに見兼ねて、己れの身分をも弁えず、何とかして、我が真心を尽くして愚見を申し上げ、主上をお慰めしたいものと思いました。

これらは全て、先の引用と同様、李陵に対する弁護が何故に行われたかを表明したものに他ならない。

以上よって、司馬遷の（李陵弁護の方法・目的）は判然とし得た。そこで次には、李陵弁護という〔目的〕のために、彼が用いた〔方法〕

を、いまま少しく詳しく考察しておこう。

司馬遷が用いた〔方法〕というのは、戦闘における李陵の武勲を陳述することであったが、果して、彼は李陵の立てた戦功をどのように把握し評価していたのであろう。司馬遷は、己れと李陵との関わりが、何ら特別なものではなく、従って、彼自身には、李陵を弁護する義務もなければ、また、その必然性もないことをわざわざ断つてから、

彼は誠の奇士であり、その人となりは、孝・信・廉・義・讓・恭であり、己れの身を顧みず、何時でも国家の艱難に殉じようとしています。

と書き出し、いよいよ彼の武勲に触れては、以下のごとく記録している。聊か長文であるが、煩を厭わず、ここに引用したい。

李陵は、五千にも満たない僅かな兵卒を率いて遠く戦場に出、深く敵地に侵入し、己れの身を危険にさらして匈奴の軍に挑み、単于の兵を殺しました。ために匈奴は死傷者の数を遙かに超えるもの、人手を欠いてそれも果せぬ程でした。李陵の軍の余りに激しい反撃に遭い、その酋長たちは恐れて震え上がる始末。そこで彼らは、左賢王・右賢王を招集し、善射の者を全て寄せ集め、国を挙げて李陵の軍を包囲したのです。李陵は転戦すること千里、矢は尽き果て道は窮まり、孤立したまま援軍も無く、士卒の屍は山と積み重なりました。そんな悲惨な状況に置かれながら、兵卒達は、李陵がひとたび叱咤し激励すれば、奮いたたない者はないのでした。彼らは身を起して涙を流し、血まみれになりながら涙をのみ、つがえるべき矢もない弓を張り、敵のきらめく白刃の中に身を躍らせ、我先にと戦死していきました。（中略）思うに、李陵は、平常より部下達と美味しいもの・少ないもの、全て一緒に分かち合つて食べる程、兵士たちに慈愛深かつたのです。だからこそ、彼は今回のごとく部下たちに死力を尽くさせることもできたと言えましよう。（将としての）

李陵の力量は、古の名将にもおさおさ劣るものではございません。成程、匈奴との戦いに敗れ、身は敵に捕えられてしまいました。彼の心中を思い遣りますに、敗戦の罪をあがなうべき戦功を上げて漢に報いようと考えているに相違ありません。彼の軍が戦鬪に敗れたこと、それは最早やどうすることもできません。しかし、匈奴を撃破し震え上がらせた李陵の武勲は、天下に明らかにするに足るものと言えましょう。

司馬遷は、所期の〈目的〉を果すために、上記のごとき〈方法〉を用いた。彼の採ったこの〈方法〉が、どれほど〈目的〉達成のために有効であったかは後に触れることにして、ここでは、今少し、彼の〈方法〉そのものを明らかにしなくてはならない。

司馬遷は、援軍も無く孤軍（それも五千に満たない少数の部隊）のまま、圧倒的大軍に取り囲まれるという状況の中で、部下たちの統率よろしく奮戦し、匈奴を震撼させた李陵に対して「古ノ名将ト雖モ過グルコト能ハズ」と讃歎する。しかし、彼がかく李陵を賛美し評価するのは、ただ単に奮戦の結果の華々しい武勲にのみ拠っているとは解するのでは、余りに表層的である。驃騎將軍霍去病が漢朝随一ともいふべき赫々たる戦功を立て、武帝から寵愛をうけ勇名を馳せたのに対してさえも、司馬遷は冷淡な評価しか下していないことから考えて、かく言い得られよう。では、何故に李陵をこれほど高く評価したのか。司馬遷は〈李陵の人間性〉そのものに共感した、とは考えられないであろうか。〈李陵の人間性〉とは、陣中における李陵の起居・生活の中に自然と滲み出て来たものであり、ここでは部下たちに対する日常的な李陵の慈愛深さそのものを意味する。華々しい戦功も彼の人間性に負うものであったればこそ、司馬遷は感動をもって、李陵を「天下ニ頭ハスニ足ル」と評価したのである。その点、戦功・勇名のみ馳せて、人間性の貧弱な霍去病驃騎將軍とは好対称である。両者のいかに対称的であるかを示すために、霍去病の人間性を何うに有効な一段を『史記』の中から一つだけ紹介しておこ

う。

霍去病は若くして尊位に居たので部下を慈しむところが乏しかった。出征に際して、天子がわざわざ調理人を遣わし、車に数十台分の飲食物を贈った。出征から帰還した時、輜重車には上等な粱や肉が捨てるほど余つていながら、部下たちの中には食に飢えた者がいた。また、塞外では部下の兵卒たちの糧食が欠乏し、自力では立ち上がれない者がいるにも拘わらず、驃騎將軍は地をうがち、整地して蹴鞠（けまり）をして楽しんでた。彼には万事これに類したことが多かつた。（驃騎列伝）

司馬遷は、霍去病のことをこのように冷徹な眼光をもって記録に留めているのである。これに対し、友人・任安に宛てた手紙の中に於ては（『史記』の中では抑えに抑えて記述していたにも拘らず）、彼は、溢れるばかりの共感をもって李陵の人間性と事跡とを吐露し表現したのであった。

以上によつて〈目的〉達成のために採られた〈方法〉は判然とした。そこで次には、上述の〈方法〉を用いて彼が企図したもの、即ち、彼の〈目的〉を再度確認しておこう。

司馬遷が目指したものは、「李陵、敗る」の報を聞いて意気消沈した武帝を鼓舞し、はた又、李陵に対する大臣・官僚たちの批判・非難を塞ぐ、というものであった。任安に送られた手紙からは、二つの目的が掲げられなくてはならなかつた経緯と義憤のほどが、痛みを伴つて伝わってくる。即ち、匈奴に出向いた李陵からの戦況報告に一喜一憂した、子供のごとくたわいな絶対権力者・武帝と、己れが何をしたら善いものやも解らず、君主の気分次第、ただただ右往左往するだけ、武帝に輪をかけてたわいななき大臣官僚たちの姿とが、実に鮮明に描き出されている。それだけではない。戦場に駆り出された兵士たちの苦しみを余所に己れの家族の安全のみ図り、アレコレ議論しては法を盾に取つて将卒を罪に陥れる官僚ども。司馬遷の痛烈な批判は、彼らにこそ浴びせかけ

られていた。李陵弁護という、いつてみれば迂遠な「方法」を借りながら、司馬遷が真に求めたものはこのことであつた、と考えられるのである。

さて、かく考え得られるならば、果してこの「目的」が、彼の提示した先の「方法」に依つて叶えられたであろうか。周知の通り、司馬遷の意図に反して、結果は宮刑に処されるという最悪なものであつた。が、ここで付言したいのは、彼自身が手紙の中で、

叡明なる君主は、私が武師將軍の功に水をさし李陵のために遊説してしていると誤解なされ、そのまま獄官に下されました。心に抱いた忠誠も、ついに述べ列ねることができず、ために主上を偽る者とされて、とうとう役人たちの決定に従うことになってしまいました。

と、記録していることである。司馬遷があれだけ批判した君主・大臣・官僚たちであつたにも拘らず、結局、彼らの餌食にされて終つてゐるのである。「目的」達成のために有効に作用するどころか、それとは裏腹に、彼の「方法」は、直ちに君主に逆手にとられて、「武師將軍の功績を誹謗するもの」・「李陵のために遊説するもの」と判断され、彼を襲う鋭鋒となつたのである。

彼の試みはかく失敗に終つたものの、これら李陵弁護の言辞の中には、常日頃より彼が心に描いていた匈奴対策が表明されていることには変りない。戦場で活躍する將軍・兵卒に功績があつた場合には、それ自体で表彰する価値があり、銃後の者たち、就中、自分の家族の保全ばかり気にかけている官吏どもが口を挟むべき問題ではなく、匈奴との戦いとは、力と力とのぶつかり合いであり、戦鬪のいかなるものかを知らぬ大臣・官僚・役人たちが軽々に議論し、取り扱うべき問題ではない。仮りにも彼らがそうしたにせよ、そんな議論など何の役にも立たず、軍事は、將軍に任すべきものである、と司馬遷は考へるのである。のみならず、それら將軍を任命・罷免するのが時の君主であつてみれば、彼が批判したのは、単に官僚たちにとどまる性質のものではなく、何よりも今の主上・

武帝を批判するものであつたらうことは、容易に読み取れるのである。ならば次に、ここで批判の対称とされた武帝と知識人との姿を、今少し「史記」の中を探つて見る必要がある。

三 武帝と知識人たち

夏・殷・周三代以来、匈奴は常に中国に患害をなしてきた。そこで、(漢帝国は)彼らの強弱の時を見計り、軍備を設けて征討しようとした。

「太史公自序」に書き記された匈奴列伝成立の経緯・理由である。「軍備を設けて征討」するというのであれば、そこには、必ずや匈奴対策が窺える筈である。

匈奴は、平時には牧畜のかたわら禽獸を狩つて生計を立て、戦時にはいづれも軍事を訓練して侵略攻伐した。これこそが、彼らの天性であつた。(中略)有利と見れば進み、不利とあらば退いて、遁走を恥と思わず、いやしくも利益のあるところ、礼儀を弁じなかつた。君主以下、みな家畜の肉を食べ、その皮革を着た。壮者は肥肉を食ひ、老人はその余りものに甘んじた。かく、彼らは壯健を貴び老弱を賤しんだ。父が死ねば継母をいれて妻とし、兄弟が死ねばその嫁を自分の妻とした。

(匈奴列伝)

事を挙げるには常に月を観察し、満ちれば攻撃し、虧れば退却した。戦鬪で敵を斬るか捕虜にすれば、一杯の酒を賜ひ、掠奪品を与え、民人を捕えれば、これを奴隸として与へた。それゆゑ戦鬪に當つては囷の兵を使つて巧みに敵を陥れた。従つて敵を見ると、利得を追ふこと鳥の集まるごとく、逆に苦敗すると、瓦解すること雲の散ずるがごとくであつた。

(同右)

司馬遷は、匈奴についてかく理解し記述している。匈奴の文化(生活・習慣)は、何もかも漢帝国のそれとは異質である。彼らの文化とは、

《遊牧》と《戰鬪》とによつて築き上げられた文化そのものであり、中國の文化とはかけ離れているのが当然であつた。彼は匈奴の文化を現存する一つの《事實》として記録したのである。司馬遷が、彼らの文化をどのように評価したかは、自らまた別の問題である。これに就いては、後に言及することにして、今は先を急ぐ。

「太史公自序」に述べられた「匈奴列伝」の成立・由来は既に見たが、その記述通り、まさしく当列伝には、高祖以来、漢帝国がいかによく匈奴と戦つてきたかが書き記されている。《遊牧》・《戰鬪》文化を持つ匈奴からの果敢かつ執拗な侵略に対し、司馬遷は、どのように対応すべきだと考えたろう。それには、漢帝国自体の対策が必要なのだと言は説く。

太史公はいう、「……世俗の匈奴を云々する俗人たちは、一時の方便を求めて天子に諂ひ、自説が聴き入れられることにはばかり懸命になり、己れの偏つた考えに都合をあわせて彼此の情勢を分析することもなく、漢帝国にとつての根本的な利害については全く考慮を欠いていた。また、将帥たちは漢の広大であることを頼んでただ意見がるだけ。君主も君主で、彼らの意見を参考にして対策を決定したので、かりにも功勞を立てることがあつたにもせよ、それは決して大きいものではなかつた。(中略)この匈奴政策に於て聖王のごとき大事業を興そうとするのであれば、ただただ賢明なる《將軍・宰相》を選任することに懸つてゐる。ただただ賢明なる《將軍・宰相》を選任することに懸つてゐる」と。

漢帝国・武帝が採つた匈奴政策に対する、司馬遷の批判である。ここに言われた「俗人・將帥」とは、己れの保身のみ奔走して君主に諂う当代の宰相と、漢土の広大なることを頼みにするしか能の無い当代の將軍とを意味してゐよう。同様に「君主」が当代の帝王・武帝その人を指すのは、諸家の注釈を待つまでもなく、自明のことである。更に付言するならば、君主に諂う当代の宰相とは、公孫弘、あるいはその一派を指す

であろうし、漢土の広大を頼みとして物量戰・消耗戰を推進した当代の將軍とは、直接には、衛青大將軍・霍去病驍騎將軍を指したであろう。

既に「任安二報ズルノ書」で見た通り、そこで司馬遷が批判していたのが何であつたかを想起したい。司馬遷が試みたのは、己れの家族の保全を計る一方で、戰場に出て戦う將軍たちの落度を探し出しては、アレコレと議論し批判する大臣・官僚たち、あるいは又、己れの定見を持たず君主の気分のままに手足の置き場所すら解らないほど右往左往する大臣・官僚たちに対する痛烈な批判であつたし、はた又、そうした無能な官僚たちに取り巻かれて根本的な匈奴対策も立てられず、従つて又、前線からの戦況報告に一喜一憂せざるを得なかつた、子供のごとくたわいない絶対権力者・武帝に対する酷烈なる批判とであつた。

ところで、司馬遷の匈奴対策を考察する上で、これら兩者（「匈奴列伝」と「報任少卿書」）に記述されている批判を重ね合わせて見ることは、妥當かつ重要である。そこで、ここでは武帝を取り巻く大臣・官僚の中心人物たる丞相・公孫弘一人を取り出して見ていくことにしよう。司馬遷は、この人に対してはあまり好ましい印象を抱いてはいなかつたようで、彼のことを、

公孫弘は生まれつき疑い深く、外面は寛大であつたが、内心は嚴酷であつた。かつて自分と不和だつた人々たちに対しても、表面上は親しそふに取り繕つてはいたが、裏に回つては秘に報復してゐた。主父偃を殺し、董仲舒を膠西に移したのは、みな彼の差し金であつた。(平津侯列伝)

太史公はいう、「公孫弘の振舞には条理があつたが、やはり時勢に乗じた人であつた」と。(同右)

などと述べてゐる。これらの記載から判断できるのは、彼が如才なくも、また陰險な人物であつたろうことである。しかし、司馬遷はただこれだけのことで彼(あるいは彼ら)のことを判断したのであるうか。答は否である。今暫く、当列伝を読み進めなくてはならない。朝廷における公

孫弘の在り様を、武帝の前における彼の姿を、司馬遷は記録に残してくれている。

かつて（公孫弘は）、公卿らと予め相談して、臣下として奏上する統一見解を出していた。が、彼は君主の前に出ると、皆との約束に背いて主上の意に合わせてしまった。汲黯が彼を責めて、「斉の者は他人をよく欺くし誠意がない人が多いというが、前にあなたと決議していたのに、今になって引つ繰り返すのは不忠実ではないか」と言った。君主が弘に問うと、彼は「私を知っている者は私のことを忠実だと言いますが、私を知らない人は私を不忠実だと言います」と謝った。主上は彼の言葉なるほどと思い、それ以後、左右の寵臣たちが彼を批判することに、いよいよ主上は弘のことを信じて彼を厚遇した。

（同右）

朝廷での会議には、予め相い反する二つの意見を用意しておき、決裁はいつも君主自身に採択させ、決して面と向って相手をなじったり、争論し合ったりしなかった。そこで、天子は、彼がそのおこないにおいては誠実であり、弁論においては余裕があり、法律・事務に習熟し、その上に儒術でもって身を整えていると考えて、彼に大いに満足した。

（同右）

ここには、如才なく君主の意を迎える、オポチュニストとしての知識人・公孫弘の姿と、誠実な硬骨漢・汲黯を疎んじ、能弁な知識人に奔弄される君主・武帝の姿とが鮮明に描き出されているといえよう。先に司馬遷が指摘していたごとく、表面では親しみ深く、その実、裏に回れば人を裏切ることなど何とも思わないという丞相・弘の日常での生活振りが浮彫りにされているのである。

ところで、更に今一つ、彼の夷狄政策に対する姿勢がどのようなものであったかを知るに足る一段を、同じく「平津侯列伝」から引いておこう。

元朔三年（前126）公孫弘が御史大夫となった。当時、漢は西

南夷と交通して東に滄海郡を置き、北に朔方郡の城を築いていた。弘は、しばしばこれを諫め、「無用の土地に労力を注ぎ込むだけで、結局は中国を疲弊させるにすぎません。どうぞお取り止めください」と言った。そこで天子は朱買臣らに命じて朔方郡を置くことの利害を述べた文書を奏上させた。それは全てで十箇条あったが、公孫弘は一箇条にも論駁を加えられなかった。弘は素直に詫びて、「私は山東の田舎者で、こんなに利益が有るとは知りませんでした。どうか西南夷や滄海郡との交通などお取り止めになって、専ら朔方郡に力を投入なさいませうに」と言った。そこで武帝はそれを許した。注釈家は、「弘の才能をもってすれば一箇条も論駁できない筈はなく、主上の意に逆らわないようにしたのだ」と言う。先から見えて来た彼の如才なさ・君主への取り入り方からすれば、頷ける意見である。それはともかく、御史大夫という、君主のかたわらに侍り、丞相に次ぐ位に身を置きながら、武帝の時代にあつては最重要問題である夷狄対策に対してさえも、この定見も無く節操も無き知識人・公孫弘は、一体、どうしたことであろうか。司馬遷の憤りと嘆きの激しさ・深さが伝わって来るのではないか。そうなのだ。彼が批判して止まなかったのは、この種の官僚たちであった。この人たちに戦場で苦しむ将卒の苦難が解ろう筈もない。彼らにできるのは、己れの家族の保全を図ることであり、陰に回って人を陥れることしかない。司馬遷は「馮唐列伝」の中に、敵の首級をたつた六級多く報告し誤っただけで、一將軍が役人に引き渡され、爵を削られたという事実を記録している。戦場で終日力戦し、敵の首を斬り兵を捕えて、その功を幕府へ上申すれば、その中にたとひ一語でも照応しない点があれば、官僚・役人たちが法に照らして糾明することになり、挙句の果ては、たつたそれだけのことで恩賞を賜ることも沙汰止みとなる。そんなことが許されるものではない。それにも関わらず、役人が法を盾にとれば必ずそれが通るのである（「馮唐列伝」）。馮唐が文帝に直接にも述べた言葉として、司馬遷は、わざわざ記録しているのである。

ことは文帝に限ったことではない。武帝の時代も同様であった。「衛將軍驃騎列伝」には、確乎とした將軍が何もかも剝奪されて一庶人に帰された例は散見するのである。

最早や贅言を要すまい。司馬遷が忌避し批判したのは、公孫弘に象徴される、表面的には穩健であるにも拘わらず、裏面では平気で人を裏切り陥れることをしても何とも思わない陰險なる知識人であった。あるいは又、たといそれが漢帝國の重大事であろうとも、己れの妻子の身の保全を優先し、自分の定見を持つこともなく君主の意を迎えることに汲々とするオポチュニストとしての知識人であった。そして、批判の鋭鋒は更に更に伸びて、時の絶対権力者・武帝にまで届いていた。上記のごとき知識人たちに取り囲まれている君主・武帝（というより、当の本人がその種の知識人を招き寄せたのであった。先に引いた通り、公孫弘が如何にして武帝から信用を勝ち取っていったかを想起すればよい）であれば、そこから繰り出される匈奴対策がよい加減なものになるうことは必定である。司馬遷に言わせるなら、そうした武帝と知識人とが採った匈奴政策の犠牲となったのが、実は、他ならぬ李陵であった、と結論されるのである。

ところで、先に言及すべくして触れられなかった問題がある。それは、司馬遷自身の匈奴観そのものである。既に述べた通り、匈奴の持つ文化が漢のそれとは異質であり、両者が全くかけ離れたものであることは、彼自身、自覚していた。では、それに対する彼の評価はどうなっていたであろうか。次には、それを問題にしよう。

四 司馬遷の匈奴観

匈奴の文化は、〈遊牧〉と〈戦闘〉とによって築き上げられた文化そのものであった。利と見れば進み、不利とあらば退いて、遁走を恥ともしなかった。いやしくも利のあるところ、礼儀を弁えなかった。壯健を

貴び老弱を賤しんだ。兄弟が死ねばその嫁を自分の妻とした。嘗々として築き上げてきた中国の洗煉された文化を以ってすれば、これは文化というには値しない、〈非文化〉であり、〈野蠻〉とも称すべきしろものであったろう。されば、司馬遷もさように理解したであろうか。彼は、直接には、この興味ある問いに答えてはいない。しかし、（中国に生まれ育ち、かつては漢帝國の文化に浴しながら、文帝の匈奴和親政策の犠牲となって彼の地に赴き、今は匈奴に仕える身となっている）中行説なる人物が述べた匈奴文化の解説を、わざわざ『史記』の中に記録し留めることによって、何よりも雄弁に私たちにその謎解きの手懸りを与えてくれているのである。しからば、その一段を検討することにしよう。

この一段は、漢からの使者と中行説との応酬で成り立っている。

漢の使者が、「匈奴の風俗では老人を賤しみます」と言うと、中行説は漢の使者を詰って、……「匈奴は明らかに戦闘を本務と考えている。老人・弱者は戦闘できないので、壯健なる者たちに美味なるものを食べさせ、そうすることで自分でも国を守っていると自負しているのである。このように老若相互に助け合い、依存しあっているからこそ各々身を保つことができている。どうして匈奴が老人を輕視しているなどといえよう」と言った。「しかし、匈奴は親子ともに同じテントの中で眠り、父が死ねば継母を自分の妻とし、兄弟が死んだ場合にはことごとくその嫁をめぐって自分の妻にする。のみならず、衣冠束帯の礼装も朝廷の礼儀もないではないか」と漢の使者が言う。中行説は即座にやり返す。「匈奴の習俗では、人はみな家畜の肉を食べ、その乳を飲み、またその皮を身に着ける。家畜は草を食べ水を飲み、季節によって移動して行く。それ故に人々は、一旦緩急あれば騎射を訓練し、平穩な時には無事を樂しむ。集団の規律は單純で実行しやすいものである。君臣間の儀礼も簡略で、一國の政治が我が身一つのように解りやすく自在である。父や兄弟が死ねば、その妻をめとって自分の妻にするが、それは家系の断絶するのを厭う

ためである。だから、たとい国が乱れても、必ずや匈奴は宗家の血筋を立てて王とする。ところが、中国はというと、うわべを飾って父兄の妻をめとらない代りに、親族間では次第に疎遠となり、互いに殺し合うことにもなり、行き着くところは主上の姓を易えてしまう革命である。中国の家という家は大概そのようなものだ。また、煩瑣な礼儀のとりきめから、上下共々怨み合うという弊害が生じている。あるいは又、精力を使い切ってしまうほど競い合って立派に家屋を作り上げ、結局、生活力を消耗してしまふ。農耕と養蚕とに明け暮れして衣食し、城郭を築いて防衛するというのであるから、一旦緩急ある時も人民は戦闘に熟練しているわけはなく、平安なる時も耕作に疲れ果てている。ああ！土でできた家屋に住む人よ、美しい衣裳を身にまとい、まことしやかに多言を弄することなかれ！冠をつけていたからといって、そんなものが何の役に立つものか。

(匈奴列伝)

長文の引用になったが、司馬遷が中行説のこの言説を記録に残したことは、極めて重要であると思える。なる程、匈奴の文化は中国のそれとは異なり、又、かけ離れている。しかし、だからといって匈奴の文化が劣っていると、どうして言えるであろうか。(老人・年長者を貴ぶ)中国の習俗から見れば、匈奴の(壮健を貴ぶ)習俗は奇異に映るに相違あるまい。あるいは又、兄が死ねばその弟が兄嫁を自分の妻とするという彼らの習慣も、はた又、彼らには整齊とした(というより、煩瑣な)儀礼も無く、美々しい礼装があるわけでもなく、あるいは又、彼らが簡素に過ぎる家に雑居していることも、中国の文化から観れば、全てが全て(文化)と称するには余りにも洗煉されぬ野鄙なものとして感じられたことであろう。がしかし、中行説の匈奴文化解説に従うなら、矢張り、そこにはそれなりの理由が存していることが知れるのである。

和親の証として漢帝から贈り届けられた中国の物資に眩惑される匈奴を見、中行説は、单于(匈奴の王)に、自分たちの文化を(中国のそれに対比させながら)、次のように弁護している。

匈奴の人口は漢の一割にも匹敵しません。にも拘わらず我々が強いのは、漢と衣食を異にしており、それら物資の供給を漢に仰ぐ必要がなく、事実、仰いでいないからであります。(中略)一体、漢の絹や綿で作った衣服を身につけて、いばら多き草原を駆け巡ってごらんさい。衣も袴もみな裂け破れてしまいます。漢の衣服が匈奴の皮革でできた衣服の丈夫で機能的であるのに及ばないことを、國人に示される必要がございます。また、漢の食べ物を手に入れられても、全て廃棄し、匈奴が作る乳製品のうちまさ便利さには叶わないことを国のものに教えられますよう。

(同上)

家畜を追い、草と水を求めて草原を駆け巡る匈奴にとって、なる程、漢の衣服は機能的であるとは言えまい。彼らの文化が、(遊牧)と(戦闘)で築き上げられた文化であつてみれば、そこにはまた、それに適した衣・食・住があつて当然であろう。従つて又、それぞれの(土地と生活)の中から産まれたものが自然に具え持っている合理性・機能性の優位性・優秀性(借りもののそれに対しての)は認めなければならぬ。先の長文の引用文と考え併わせて、中行説による匈奴文化の認識とその解説は、極めて妥当なものだと言えるのである。そして、司馬遷は、それをそれとして記録したのである。

司馬遷は、中行説のこの「匈奴文化」認識・解説を果してどのように受け止めたか、あるいは又、(匈奴の文化)そのものを、他ならぬ彼自身はどのように評価したのか。この問に対する答は、実は、彼自身がかくのごとく(中行説の「匈奴文化」認識・解説)を当列伝の記録として書き留めたこと自体の中に見い出すか、さもなければ、匈奴の習俗・生活など(いわゆる、匈奴の文化)を、彼がいかに正確に記述しているかというところの中にこそ(あるいは、それら両者の中に)見い出されるべきであろう。後者の視点からいうならば、匈奴の歴史と文化を語って、『史記・匈奴列伝』として結実・結晶させてみせた司馬遷の右に出るものは、他にあるまい。匈奴の文化を、(遊牧)と(戦闘)とが築き上げ

た文化だと規定したのは彼であり（「匈奴列伝」の冒頭の一段に、「其ノ俗、寛ナルトキハ即チ畜ニ随ヒ、因リテ禽獸ヲ射獵シテ生業ト爲ス。急ナルトキハ即チ人、戦功ヲ習ヒテ以テ侵伐ス。其レ天性ナリ。」とあるのを想起したい）、これは、匈奴の単于に仕えた中行説の文化認識に、奇しくも一致するものである。がしかし、司馬遷と（匈奴に仕えていた）中行説との、〈匈奴の文化〉の把握・認識の奇しき一致こそは、とりも直さず、司馬遷自身の、異質な文化に対する観察眼の確かさ・鋭さを示すものに他ならない。

さて、この確かな眼を持った司馬遷が、漢の文化と匈奴のそれとを比較し、且つ、優劣を付けようとした（〈中行説と漢の使者との応酬〉を、何故にわざわざ書き残した（既に上に引用済み）のか、その意味を考えなければならぬ。しかも、その応酬というのが、どう見ても中国文化を代表する漢の使者に分が悪い応酬なのであった。無論、彼が自虐的であつたということでもあるまい。彼の眼の確かさをもつてすれば、

匈奴は天道に逆らい、人倫を亂し、年長者・老人を酷使・虐待し、窃盜を務めとなしている。近隣の蛮夷の国々を偽って、謀略をしかけてはその国々から援軍を借り、しばしば我が辺境に害を与えて来た。それ故、兵を興し將軍を派遣して、彼らの罪を懲らしめるべく征伐した。

（衛將軍列伝）

との、武帝の詔が持つ欺瞞性など、たちまちに見破つたであらう。ならばこそ、武帝のこの詔勅が、他ならぬ「衛將軍列伝」に記録されたのである。それは兎も角として、問題は、司馬遷が匈奴の文化をどのよう^註に評価したか、である。が、既に述べ来たことからして、結論は出ていよう。即ち、司馬遷は、匈奴の文化を、なる程、中国のそれとは異質なものとして認識はしたが、だからといって、匈奴の文化を愚劣なもの、蔑視・唾棄すべき文化・〈非文化〉と見なしはしなかった。中国文化を代表した漢の使者が匈奴文化を代表した中行説に遣り込められたという一つの事実を、あえて司馬遷が記録したことが、その明証である。

否、それどころか、この何でもない一つの事実の中に、司馬遷は、漢の文化そのものが包含する危機を、明敏にも察知していたのではなかつたか。

思うに、『公羊伝』に代表される〈中華思想〉・〈王道思想〉の曲々しい欺瞞性（中華思想や王道思想や、同一文化圏における国家間・民俗間、あるいは〈進んだ〉文化を受容せんものと自ら求めて来るそれらの間ではさしたる問題にはなるまい。が、異質な文化を持つ国と国、あるいは民俗と民俗との間では、自ら「進んだ」と称する〈漢の文化〉の一方的な強要であり、〈文化の光被〉との美名を借りた、あざとい〈文化侵略〉そのものではある。中行説は、その欺瞞性を看破した人であつた）に対して、特に、武帝とその時代の、精神的・空間的な〈拡張した世界〉（文明圏の拡大による膨張した中国）が否応なしに帯びてしまう文化の稀薄性・軽薄性・欺瞞性に対して、いわば警鐘を鳴らすものとして、司馬遷は武帝の匈奴政策を批判し、あるいは、武帝を取り巻く知識人たちを批判したのではなかつたか。また、その際、彼の耳の奥底には、先の、中行説の〈匈奴文化の解説〉が鳴り響いていたらうことは容易に想像されることではある。

一体、匈奴〈観〉とは、匈奴の〈習俗・生活・文化〉をどれほど客観的、且つ正確に認識・把握するか、その客観性・精確さの密度によって匈奴〈観〉も変容するものである。が、司馬遷の場合には、単に觀念的に構築された匈奴〈観〉というのでは決してなく、匈奴の〈習俗・生活・文化〉を、徹然たる、匈奴の現実として、揺るぎなき一つの事実として認識・把握し、更にそれを記述・記録することによって、結果を見、我々に提示された匈奴〈観〉であつた、とは言い得られよう。

五 結び

武帝の時代に加熱した中国文明圏拡大の問題、端的には、匈奴問題は、

その時代に生きた全ての知識人を巻き込んでいった。司馬遷は、〈匈奴問題の解決〉という大きな渦の中に、紛れるかたなく身を投じ、そして傷つき、大舞台から退場していった人である。その点、〈李陵の禍〉は、彼の対匈奴策の出発点であるとともに、又、帰着点でもあったと言える。〈匈奴に降った〉李陵を弁護した、ただそれだけのことで、腐刑という屈辱的な刑に処せられた司馬遷ではあったが、既に見来たったごとく、彼は、単に李陵の弁護をしたわけではなかった。彼が期したのは、武帝が採った匈奴対策を批判することであり、さしたる根拠もなく(あるとすれば、己れの家族の身の保全を優先することか)、武帝の施政方針を己れの匈奴対策として推進する、己れの定見を持たぬばかりか、従って又、何の批判精神も持たぬ、武帝の回りをただ右往左往するだけの愚劣・軽薄な大臣・官僚たちを批判することであった。彼は指摘していた。

世俗之言匈奴者、患其微一時之權、而務諂納其說、以便偏指、不參彼己、將率席中国広大、氣奮、人主因以決策、是以建功不深、(中略) 且欲興聖統、唯在斥任將相哉、唯在斥任將相哉、(匈奴列傳)

と。人主・知識人と彼らの匈奴政策とをかく批判した後に、彼が提示して見せたものは、要約するならば、「功ヲ建テ」、「且ニ聖統ヲ興サント欲スルニハ、タダ將相ニ斥任スルニ在リ、タダ將相ニ斥任スルニ在リ」ということであった。単純と言えばその通りだが、彼がこの単純なことを提唱し得たのは、漢朝に巢食う無能な知識人たちを觀、また、多くの、武勳赫々たる將軍たち(李陵はその中の一人であった)が、武帝とそれを取り巻いている無能な大臣・官僚たちとに、いとも容易く潰されては、消されていく姿を見せつけられたことによるのであろう。が、更に重要な要因を忘れてはならない。それは、司馬遷の〈匈奴文化の認識〉の確かさである。司馬遷は、匈奴の文化を〈遊牧〉と〈戦闘〉とによって築き上げられたものである(匈奴列傳)と把握し、また、彼らの文化は(中国の、ではなく)「匈奴」の文化であり、その文化を嚴然たる一つ

の事実として認め、その上で、匈奴に対する対応を考えたのである。この認識の上に立てばこそ、司馬遷の匈奴対策は産まれたのである(「世俗ノ匈奴ヲ言フ者ハ、……彼己ヲ參セズ」と彼は述べていたではないか)。司馬遷は、果敢且つ執拗に侵略・攻撃を仕掛けて来る匈奴に対して、決して和親策を主張したわけではない。否、むしろ戦闘で鍛え上げた匈奴であれば、こちらも戦闘・武力によって対抗しようとしたのである。ならばこそ、彼は、賢明なる「將(軍)・(幸)相」を選び出し、彼らに政治・軍事を任せざることを主張したのであった。司馬遷が「太史公自序」の中で、「匈奴列傳」を立てる目的を、次のごとく述べていたことを、決して忘れてはならない。

自三代以来、匈奴常為中国患害、欲知強弱之時、設備征伐、作匈奴列傳、

と。ここに見える通り、匈奴が長年にわたり中国に対して害悪を為して来たので、彼らの武力・戦闘力の消長を觀察し、こちらもそれに対抗できる軍備・戦闘力をつけて、遠征・対抗し、圧倒せんとする、と云うのである。中国が産み出し、更に観念的に尖鋭化していった〈中華思想〉・〈王道思想〉などは、ここには、その片鱗をすら見受けることができないのである。というより、むしろ逆に、彼らの土儀(つまり、匈奴の〈戦闘の文化〉)の中で戦おうと、司馬遷は言うのである。極めて単純、且つ明快な武力闘争を主張・展開しているに過ぎない。

さて、今一度「報任少卿書」に戻ろう。この長い長い手紙の中には、「僕懷欲陳之、而未有路、適会召問、即以此指、推言陵之功、欲以広主上之意、塞睚眦之辞、未能尽明」とも、あるいは、「僕与李陵俱居門下、素非能相善也、趣舍異路、未嘗銜盃酒接殷懃之余權」とも見えていることからして、司馬遷自身が匈奴対策(上述した)ごとき、武帝批判・官僚批判までも含めてのそれを堅持していればこそ、この日(「召問」の日)を待ち構えての、將軍・李陵(決して友人・李陵ではなかった!)の弁護であったのである。先に、〈李陵の禍〉は彼の対匈奴策の出発点で

あるとともに帰着点でもある、と述べておいたのは、この意味である。司馬遷が対匈奴策を披瀝できたのは、他ならぬ李陵事件に関わる意見を求められた（この時）を以てはなかつたし、しかも、意見具申の結果は、周知の通り、無惨であった。全てが終った。これ以後、司馬遷は人前で匈奴対策を語ることは無かつた。彼には、『史記』の述作が残されているだけであつた。そして、その『史記』の中で、述べてはならぬ匈奴対策を語つたのである。

司馬遷の匈奴対策が、漢代知識人の間にあってどれ程の特徴を持つものであるのか、あるいは、彼の匈奴観が思想史の中でどのように位置付けられるのか、新しい問題が掲げられなければならない。

註

1 たとえば、武田泰淳『司馬遷—史記の世界—』（講談社、一九六五年七月）の「司馬遷伝」参照。

2 この他、当列伝の中には、「諸宿将所将士馬兵亦不如驃騎、驃騎所得常選、然亦敢深入、常与壮騎先其大軍、軍亦有天幸、未嘗因絶也、然而諸宿将常坐留落不遇、由此驃騎日以親貴、比大將軍」とも記録されており、漢の軍隊中の最精鋭を引き連れている霍去病が常勝するのは当然であつた、とも述べてもいる。のみならず、同じ列伝中、衛青大將軍を批評しては、唯、衛青大將軍自身の言葉「招賢細不肖者、人主之柄也、人臣奉法遵職而已、何与招士」を引用するだけで済ませているのは、大將軍でありながら、唯、君主に忠実であつたろうことが知れるのみで、司馬遷が、大將軍衛青をしも冷たく評価し去つていと判断せざるを得ないし、更に、問題の驃騎將軍に至つては、「驃騎亦放此意、其為将如此」と評されるだけで、なおのこと冷徹にあしらわれていると言えよう。司馬遷が將軍・李広を「伝曰、其身正、不令而行、其身不正、雖令不從、其李將軍之謂也。……及死之日、天下知与不知、皆為哀哀、彼其忠実心誠信於士大夫也、諺曰、桃李不言、下自成蹊、此言雖小、可以論大也」（李將軍列伝）と、数多の列伝の中でも、最

高級の讃辭を以つて評しているのと、正しく対称的である。

3 軍事は將軍に一任するものであるとの考えは、「馮唐列伝」に、「臣聞上古王者之遣將也、跪而推轂、曰、闔以内者、寡人制之、闔以外者、將軍制之、軍功爵賞皆決於外、歸而奏之、此非虛言也、臣大父言、李牧為趙將居邊、軍市之租皆自用饗士、賞賜決於外、不從中擾也、委任而責成功、故李牧乃得尽其智能」と述べた馮唐に対して、司馬遷が「馮公之論將率、有味哉、有味哉」との評価を下していることから観て、かく言ひ得るであろう。

4 張守節の『史記正義』は、この部分に、「言竊雖賢聖、不能独理、得禹而九州安寧、以刺武帝不能振賢將相、而務諂納小人浮説、多伐匈奴、故壞齊民、故太史公引禹聖成其太平、以攻当代之罪」と注解を施している。

5 『史記集解』並びに『史記索隱』は、韋昭の「以弘之才、非不能得一也、以為不可、不敢逆上耳」を引いている。

6 「終日力戰、斬首捕虜、上功莫府、一言不相心、文史以法繩之、其實不行而吏奉法必要、……且雲中守魏尚坐上功首虜差六級、陛下下之吏、罰其爵、罰作之」と見える。

7 たとえば、合騎將軍孫敖、衛尉李広、博望侯張騫、右將軍食其、游擊將軍蘇建などを数え上げることができる。

8 「衛青將軍驃騎列伝」の特殊性に就いては、先の、武田泰淳の『司馬遷』に触れられている。

9 武帝自身、あるいは武帝の治下で、どれほど世界の拡張が企図されたかは、彼が賢良に課した「策問」と、現実に彼自身が採つた匈奴政策を見れば足りよう。更には又、武帝の下に集まつた知識人たちを觀れば、この世界が持つている文化の軽薄性・欺瞞性が知れようというものである。

10 たつた六つの首級を数え誤つただけで、一庶民に為つた將軍のあつたことを想起したい。なお、註6参照。

11 「匈奴列伝」には、「太史公曰、……且欲興聖統、唯在扞任將相哉、唯在扞任將相哉」と述べていた。註3参照。

付記 本稿の一部は、一九八五年十二月の岡山県漢字・漢文教育研究会において口頭発表した。なお、小論は、武田泰淳氏の「司馬遷―史記の世界―」に負うところが大きい。

(昭和六十一年三月二十八日受理)